

## 第1回



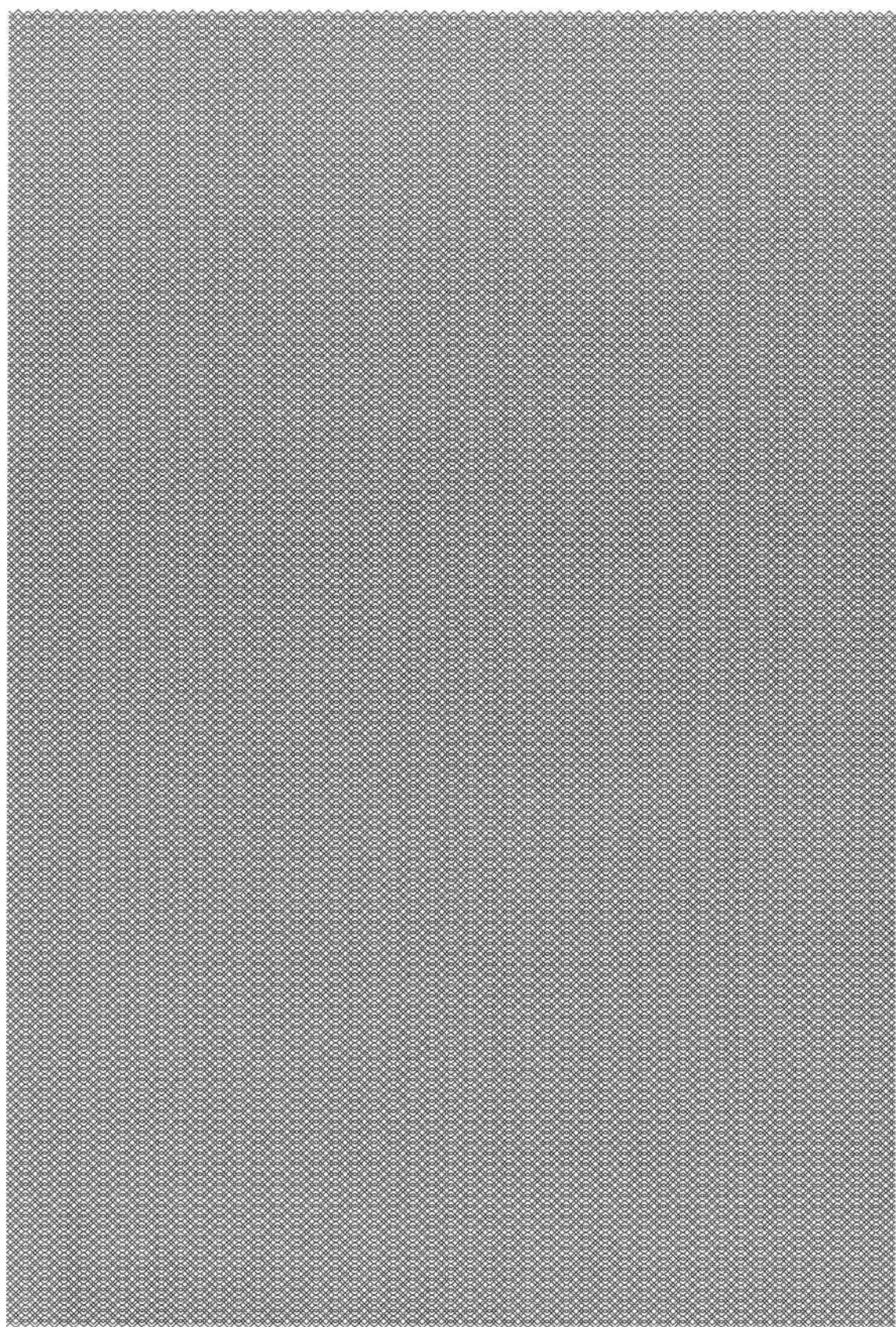
令和6年度

## 国語

## 注 意

1. 指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
2. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
3. 受験番号は、算用数字で分かりやすくはっきりと書きなさい。  
氏名にはふりがなを忘れないこと。
4. 私語、用具類の貸し借りは禁止します。
5. 試験終了後も指示があるまで席をはなれてはいけません。
6. 質問があるときは、静かに手をあげなさい。
7. 解答用紙のみ提出しなさい。問題用紙は持ち帰りなさい。  
問題用紙の余白は下書きに利用してかまいません。
8. 文字は濃くていねいに大きく書きなさい。消しゴムを使ったあとは余計な点や線などの消し残しがないかよく確認した上で書きなさい。

受験番号				ふりがな	
				氏名	



一

次の1～5の傍線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1 峽谷に出かける。
- 2 困苦に耐えて大成する。
- 3 全幅の信頼を置く。
- 4 直ちに持ち場につく。
- 5 皆目わからない。

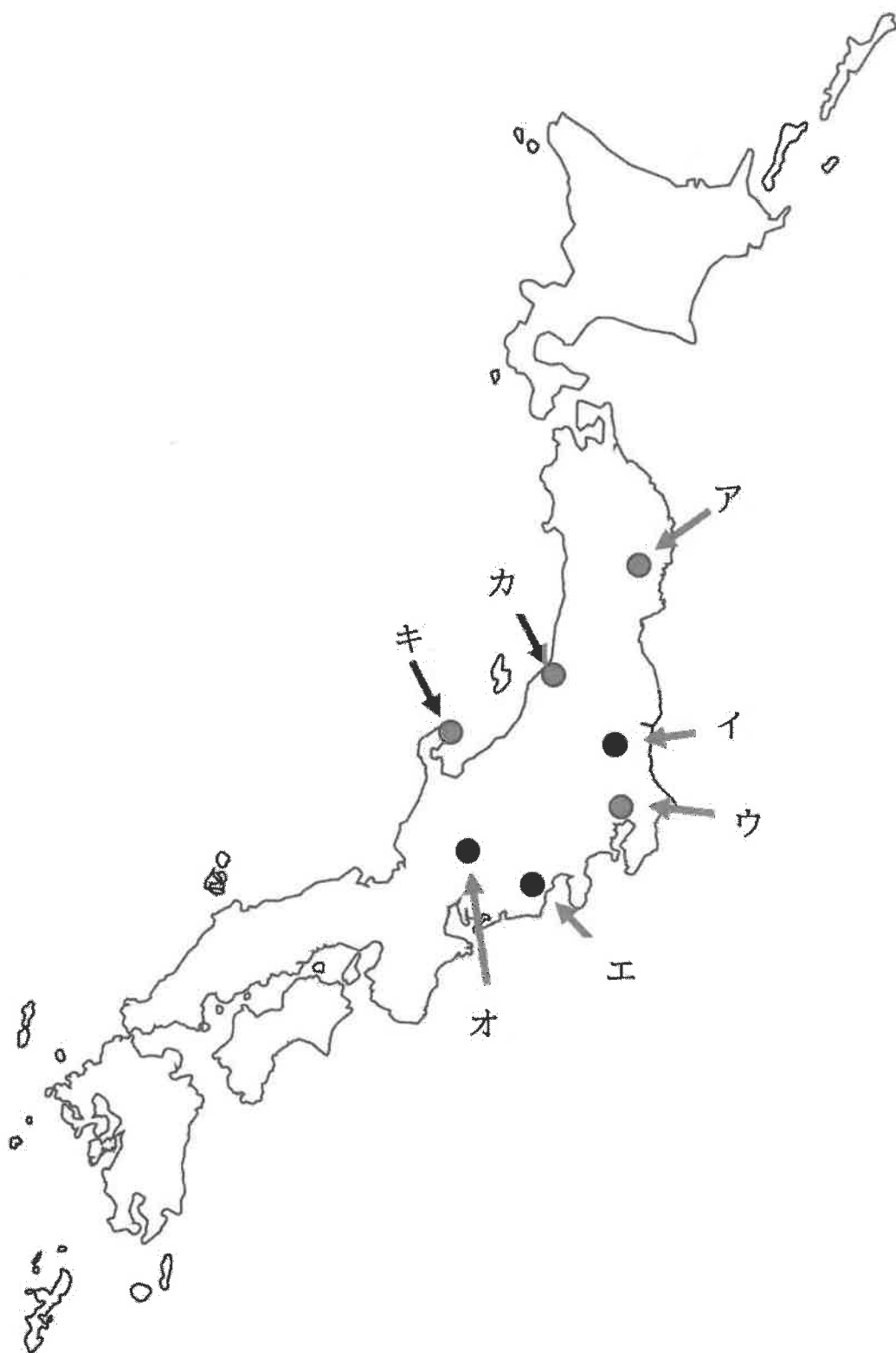
二

次の1～5の傍線部のカタカナを漢字で答えなさい。

- 1 試験合格というロウホウが舞い込んだ。
- 2 コウシュウの面前で批判される。
- 3 ショサの美しい人。
- 4 勇気をフルって立ち向かう。
- 5 イシツブツを届ける。

松尾芭蕉の紀行文である『おくのほそ道』は、元禄二年三月から九月にかけて、江戸から奥州・北陸をめぐる美濃の大垣に至るまでの約百五十日の旅を記録しています。次のA～Eの俳句は『おくのほそ道』に収められています。これらの俳句を、詠まれた順番に並べ替えなさい。また、詠まれた場所（地域）を、図の中から選びそれぞれ記号で答えなさい。

- A 荒海や佐渡によこたう天の河
- B 蛤はまぐりのふたみにわかれ行く秋ぞ
- C 行く春や鳥啼なき魚の目は泪なみだ
- D あらとうと青葉若葉の日の光
- E 五月雨の降り残してや光堂



#### 四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ジローは自他ともに認めるお調子者であり、その明るさから人に頼み事をされやすく、それを断ることもなかった。中学三年生の夏休み、部活動最後の大会を終えたジローは、学校代表として駅伝大会に出るように頼まれ、その翌日から練習に参加し始めた。大会本番、ジローは3区を走ることになった。

大田から受け取った襷<sup>たすき</sup>は重かった。この一瞬に俺たち以上のものをかけているのだ。いい加減なことばかりやってきた大田にとって、この駅伝の持つ意味は大きい。駅伝にかかわっていた時間は、大田にとって唯一中学生でいられた時間だったにちがいない。いや、まだこの時間は続く。上の大会に進んで、あと少し大田にこういう思いをさせてやりたい。

そう意気こんではみたけど、駆け出して500メートルも行かないうちに、俺は後ろにいた三人に抜かれた。記録会でも俺よりずっと速かったやつらだ。こいつらと同じように走っては、最後までもたない。俺は軽く腕を揺らして、<sup>①</sup>はやる気持ちを抑えた。

3区はなだらかなコースだから、勝負をかけてくる学校も多い。だけど、ペースを崩すな。梶井<sup>ますい</sup>がスタート前に言ったことを思い出して、俺は一步一步足を進めた。俺を抜いたやつらはずいぶん前に進んでいるけど、これでいいのだ。まだ五位なのだから落ち着いていこう。今の俺は自分のペースがわかつている。ど素人だったころの俺とは違うんだ。焦って台無しにするな。大事に走らなくてはいけない。これは記録会でも試走でもなく、本番なのだ。

俺が走る道の横には田んぼが広がっている。来週に稲刈りをする家が多いのだろう。刈られるのを待っている稲穂が Aと日の光を受けている。いい風景だ。田舎から早く出ていきたいと言っているやつらも多いけど、俺はこの地域を気に入っていた。すぐ間近に川があり山があり田んぼがあつて、それぞれ季節ごとに違う香りがする。<sup>②</sup>俺は思いっきり田んぼの香ばしい匂いを吸い

込んだ。

1キロ地点を俺は試走より一割ほど速いペースで通過した。いいペースで走っているはずだ。しかし、1キロ通過直後のゆるいカーブで後ろにいた集団にとらえられた。そして、カーブを曲がり切り体勢を立て直そうとしたところで、あっけなくその集団に抜き去られてしまった。

いくらなんでも抜かれすぎだ。俺を抜いた集団は六人。二位でもらった襷は、もう十一位まで落ちている。ペースを守ったって、こんなに後ろに追いやられたんではどうしようもない。俺は何とか取り戻そうと、ピッチを上げた。だけど、前を行くみんなも同じようにスピードを上げている。これ以上離されたら、やばい。何とかしなくては。けれど、いくら加速しても追いつかない。どこの学校だって必死なのだ。いろんなことを乗り越えているのは、俺たちだけじゃない。前との距離は、俺の走力でどうにかできる範囲を超えている。俺は焦りと不安で心臓が速くなるのを止められなかった。

こんなの謝ったってすまないよな。みんなが懸命に練習していた姿を思うと、泣きたくなった。設楽したらかや大田つなが繋いできたものを俺が崩してしまう。二人とも試走以上のいい走りをしたのに、俺がそれを無駄にってしまう。そう思うと、逃げたくなった。だから、B 引き受けるんじゃないかったんだ。

「岡下とか城田にはさ、なんて言っただ断られたんだ？」

夏休みの終わり、暑さと練習の厳しさでバテそうになった俺は榊井かきに訊いてみた。みんながどんなふうにもうまいこと断るのか知りたかったのだ。

「岡下にも城田にも頼んでないよ」

I

「なんだってって？」

俺と同じ練習をしたはずなのに、榊井は涼しい顔のまま首をかしげた。冷却装置でもついているのかと思うほど、榊井は真夏で

もさざりとしている。

「どうやって駅伝を断ったのかと思ってさ。三宅って気が弱そうなのに、いざという時には断るんだな」

少し勇気を出して拒否すれば、後々しんどい思いをしなくてすむのだ。断るのは一瞬、引き受けたら一生だな。暑さに参ったせいか、俺はほんの少し後悔しそうになっていた。

「三宅にも安岡にも駅伝の話すらしてないよ。大田に声かけて渡部に声かけて、それでジロー。他には頼んでないけど」

II

渡部と俺の間に、足の速いやつなんて何人もいる。みんなに断られて、いく当てがなくなって回ってきたと思っていた俺は驚いた。

III

「ジローならやってくれるだろうと思ったし」

「だって、誰にも断られてないんだろう？」

「そうだって言ってるじゃん」

「俺が三番目？」

ストレートで俺のところに依頼が来るなんて、不思議だ。俺が何度も訊くのに、榊井は笑い出した。

「そうだってば」

IV

「まあ、ジローなら簡単に引き受けてくれるだろうって期待したのは確かだけど、だからってジローに頼んだわけじゃないよ」

V

他に俺に駅伝を頼む理由などあるだろうか。俺は榊井の顔を見つめた。

「うーん、ジロー楽しいし、明るいし。ほら、ジローがいるとみんな盛り上がるだろ」



「そんなの走ることにも何も関係ないじゃん」

「そうだな。でも、うまく言えないけど、<sup>④</sup>やっぱりジローはジローだから」

いつもの確に答える榊井が困っている。でも、榊井の言いたいことはわかった。

高校に大学にその先の世界。進んで行けばいくほど、俺は俺の力に合った場所におさまってしまうだろう。力もないのに機会が与えられるのも、目に見える力以外のものに託してもらえるのも、今だけだ。速さじゃなくて強さでもない。今、俺は俺だから走っている。

「ジロー、がんばれ！」

「あと1キロだよ！」

「ジロー、ファイト。ここからここから」

広い道に出ると、沿道には応援をする人が溢<sup>あふ</sup>れていた。俺にもいろんな声が届く。クラスメートの声、バスケット部の後輩の声、仲のいいやつらのおばちゃんやおじちゃんの声まで聞こえてくる。

「ジロー、しっかり！ 前、抜けるよ」

あかねちゃんが叫ぶのも聞こえた。俺の告白を断ったって、あかねちゃんは俺を応援してくれるのだ。

「ちよつと、真二郎、あんた真剣に走りなさいよ！」

もちろん、一番でかい声を出しているのは母親だけだ。

渡部が言ったとおり、俺は<sup>⑤</sup>何一つ損なんかしていない。いつもの調子で引き受けたからこそ、今ここにいられるのだ。俺は身<sup>からだ</sup>体

に神経を向けて、自分の残っている力を確認した。いける。ここから残り1キロ弱。ペースを上げても走りきれぬ。元気がいい走り。上原に褒められたように、思い切りのいい走りをしよう。俺は前を走る集団を見すえて、腕を大きく振った。<sup>⑥</sup>

息を切らしながら走っているうちに、中継所が近づき渡部の姿が見えた。唯一俺が苦手とするやつで、唯一俺を心配してくれるやつ。今はどうだろう。走れもしないくせに引き受けてと、やきもきしながら見ているだろうか。いや、そんなことはない。俺が俺らしくやりさえすれば、渡部は認めてくれるはずだ。

「ジロー。いいぞ、そのままそのまま。ここまで」

渡部は手を振りながら、叫んでいる。早くあの手に襷を渡さなくては。俺は集団の中に突っこむのも気にせず、一心不乱に渡部をめがけて走った。

「頼む」

「了解」

渡部は手早く襷を受け取って、すぐさま駆け出した。これでもう大丈夫だ。渡部に襷をつないだ<sup>⑦</sup>とたん、俺の身体も心もすっとほぐれていった。

(瀬尾まいこ『あと少し、もう少し』)

問一

A

B

を埋めるのに最も適当な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア はいはい    イ どしどし    ウ きらきら    エ わざわざ    オ じりじり

問二

I

V

に次の会話をあてはめたとき、どのような順番になりますか。

I

と

IV

を埋めるのに最も適当なもの

のを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　じゃあ、何だ？

イ　そっか。あいつら短距離だもんな。じゃあ、三宅や安岡？　あの辺はなんだって？

ウ　渡部の次が俺？

エ　すぐに俺に頼むなんて、そんなに断られるのが嫌だったのか？

オ　どうして俺なの？　たいして走るの速くないのに

問三

——線部①「はやる気持ち」とは、どのような気持ちを表していますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、

記号で答えなさい。

ア　良い順位で襷をつなぎ自分も速く走れることを仲間に認めさせたいという気持ち。

イ　周りに惑わされず自分のペースを守りながら慎重に走ろうという気持ち。

ウ　上の大会に進むために自分を抜いたやつらに追いつかなければならないという気持ち。

エ　本番の大会なのだから記録会や試走よりも良い記録を出そうという気持ち。

オ　記録会で自分より速かった三人を見返してやろうという気持ち。

問四 ―線部②「俺は思いつきり田んぼの香ばしい匂いを吸い込んだ」とありますが、このときのジローの状況を説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 普段あまり見ることもない故郷の景色を改めて眺めることで、自身の郷土愛に気付かされている。
- イ 自分が生まれ育った土地の匂いを体に取り込むことで、周囲から応援をうけた気になっている。
- ウ 稲刈り前の独特な匂いから秋の気配を感じ取り、自然豊かな故郷の情景に改めて感じ入っている。
- エ 自分が慣れ親しんだ風景を見渡し大きく息をすることで、落ち着いてペースを守ろうとしている。
- オ 周囲の様子や鼻孔をくすぐる匂いにふと気を取られてしまい、走りに集中できなくなっている。

問五 ―線部③「焦りと不安」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中継所が近づいてきたので、先頭に追いつくための手段をいよいよ投じるべきではないかということ。
- イ このまま当初の予定通りペースを守り続けていては、良い結果を迎えられないのではないかということ。
- ウ ピッチを上げこれまでのペースを崩してしまったために、襷がつかないのではないかということ。
- エ 自分がこのまま順位を落としてしまうと、みんなから批判されるのではないかということ。
- オ 前の走者にさらに差をつけられたら、皆の頑張りをふいにしてしまうのではないかということ。

問六 — 線部④「やっぱりジローはジローだから」にはどのような期待が込められていると考えられますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ゴールした後に倒れるくらい、全力を出し尽くして走ってほしい。

イ 精一杯応援して、必死に走っている皆を笑顔で迎え入れてほしい。

ウ たとえ遅くても、見ている人に感動を与えるような走りをしてほしい。

エ みんなで駅伝を走り切る上で、ムードメーカーの役割を果たしてほしい。

オ 仲の良い友人が多いので、沿道で応援してくれる人を集めてほしい。

問七 — 線部⑤「俺は何一つ損なんかしていない」とありますが、どういうことを表していますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア なんとなく引き受けた駅伝なのに、思いがけず自己の成長の機会となったことを実感しているということ。

イ 大田や榊井ほどには駅伝に対する思い入れがない自分だから、もし悪い結果でもあまり気にしないということ。

ウ たとえ上の大会に出場できなくても、自分が全力を出したのなら責任は誘った人にあるということ。

エ 自分の走りができず仲間迷惑をかけてしまったけれど、自分が責められることはないということ。

オ 上の大会に出場できなかったとしても、自分にとっては駅伝の選手に選ばれたという名誉だけが残るということ。

問八 ――線部⑥「腕を大きく振った」という表現は本文中でどのようなことを表現していますか。その説明として最も適当なもの

のを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア とにかく残りの一キロ弱を全力疾走するために、これまでの抑えた走り方をやめて持てる力を出し切ろうとする必死さを表している。

イ 様々なことに思い悩むのではなく周囲を明るくする自分のよさに気づき、普段通りおどけてふるまえるようになったことを表している。

ウ 集団に抜かれてしまったことで不安な気持ちに押しつぶされそうになったが、自分らしくあることの大切さに気付いた心情の変化を表している。

エ 駅伝の走者として走ることを通して自分に過度な自信が持てるようになり、これまでにない力がみなぎってきたことを表している。

オ 襷をつなぎ最後まで走りきるためにペースを守っていたが、たとえ襷がなくなっても自分自身のために全力で走る決意をもったことを表している。

問九 ―線部⑦「俺の身体も心もすつとほぐれていった」とありますが、この描写はどのようなことを表していると考えられますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア これまで頑張ってきた駅伝が終わり、目先の目標がなくなってしまったジローの喪失感。

イ 最後の頑張りによって、最終結果が悪くても責められることがなくなったジローの解放感。

ウ どんなに疲れていても、周囲からの声援が力となることを体験したジローの高揚感。

エ 集団に抜かれ精神的に追い詰められても、一度も諦めずに走り抜いたジローの充実感。

オ 緊張や重圧を乗り越え、糧を無事につなぐという役目を果たしたジローの安堵感。

問十 次の会話文は、この文章を読んだ中学一年生が話し合っている場面です。本文と合致する意見を述べている生徒一人を選び、記号で答えなさい。

Aさん 「大田さんから襷を受け取った時のジローさんは、怖かったと思うんだ。予想以上に良い順位で大田さんから襷を受け取ったんだよ。ジローさんはもつと気楽な順位で本当は襷を受け取りたかったんじゃないかな。」

Bさん 「もともと足の速いランナーが集まる区間に、足の遅いジローさんが配置されているんだよ。どんなに抜かれても、気にしていなかったんじゃないのかな。多分、最初から諦めていたと思うよ。」

Cさん 「走り始めた頃は足の速い生徒のことは気にせず、自分のペースを守ることだけに意識を働かせていたんじゃないかな。心に余裕があったから周囲の風景を見たり感じたりできたんだよ。結果的に試走よりも早いペースで走れていたしね。」

Dさん 「集団に追い抜かれた時、ジローさんは絶望の底にいたと思うんだ。自分のせいで負けてしまうって。だからペースを必死にあげたんだよ。でも追いつかない。だから自分を駅伝に誘った榊井さんを恨みながら走っていたんだ。恨みがジローさんに力を与えたのかも。」

Eさん 「最後にジローさんが力を発揮できたのは声援のおかげだね。一番大きな声を出していたお母さんもそうだけど、やっぱりあかねさんの声援が大きくなったんじゃないかな。告白を断られたとはいえ、カッコいい姿を見せれば、もう一度チャンスがあるかもって思うからね。」



次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

建築の世界で、妙な現象が進行しつつある。雑誌が信用を失いつつあるのである。正確に言えば、雑誌にのっている写真が信用を失いつつある。誰も、その写真を信じようとはしない。そして実は、この現象、建築に限った話ではない。

最大の理由は、コンピューターによる画像処理技術の進歩である。一度撮った写真をどんな風にも加工することができるようになった。

I、紹介される建築作品の手前に立っている電柱が邪魔だと思ったならば、消してしまいうことが出来る。後ろに立っているビルが醜くてめざわりだと思ったら、消去して、かわりに青い空を背景にペーストすることができる。抜けるような青空だけを背景にすくと作品が建っている純粋な風景が欲しければ、それがなんなくできてしまうのである。

この程度なら、すなわち背景のタッチアップ<sup>①</sup>だけならば、まだ罪は軽いかもしれない。おそろしいのは、建築作品自体の画像処理である。建築主の要望で選択した屋根の色が気に入らないので、茶色の屋根を、クールなシルバーに画像変換し、印刷してしまうなんてことも可能である。

II、建築基準法の高さ制限のせいで、作品がズングリムツクリしてしまったので、縦横の比率を少し変えて、建築を細長く、スレンダーに変形して、雑誌に紹介するなどということも可能になった。

その手の画像処理が、現実の建築雑誌でどこまで行われているかは、僕もわからない。III、問題は、現実にとどこまで行われているかではなくて、行われているにも不思議ではないし、しかたがないと、誰もが感じていることなのである。ではなぜそんな風に、みんな諦め気味なのだろうか。なぜ誰も、これを問題視しないのだろうか。

理由は単純である。建築雑誌がXで、編集されているからである。真実か虚偽かという価値基準に支配されているメディア（たとえば報道）では、このような画像処理は決して許されない。編集者の首が飛んだり、社長が謝罪するほどの話である。ところが、建築雑誌で一番問題とされていたのは、真実ではなく、美であった。美のためなら真実は犠牲にしてもいいという風土があった。それゆえ、コンピューターの画像処理が今のようなレベルに達する以前から、似たようなことはいくらでも行

われていた。フィルターを使って、色を変えてしまったり、極端な望遠レンズや広角レンズを使って、画像を歪<sup>ゆが</sup>ませてしまうことは、Aに行われていたのである。しかも、これは二流の建築家がやるゴマカシではなくて、一流の建築家ほど、これらの画像処理に熱心であった。

二〇世紀最高の建築家と呼ばれるル・コルビュジエが、画像処理の達人であったことは、よく知られている。彼はしばしば、写真の上にエアブラシなどの技法を用いて手を加え、平然として作品集に掲載した。彼の作品の背景の建物や山は消去され、すっきりとした青空のバックが捏造<sup>ねつぞう</sup>された。シャープな影によるメリハリがお好みで、明るい壁面と暗い壁面の境界に定規で線を引き、影の部分を暗く塗りつぶすのも得意技であった。最高の建築家が平気でこんなことをする。しかもそのことが、彼の建築家としての評価を下げることは一切ない。それが建築という世界だったのである。

それは単に、ジャーナリズムの姿勢の問題ではない。ジャンル全体の姿勢、価値基準の問題なのである。建築とは、美、正確にはBな美という価値基準によって支配されたフィールドであった。建築物が美しいか、醜いかという判断が、すべてに優先された。そのこと自体が問題なのではない。そのようなフィールドが、二〇世紀にはもっぱら写真というメディアに依存せざるを得なかった。そこにこそ問題があったのである。なぜなら、写真自体がきわめて曖昧で、②いい加減なメディアであったからである。このメディアは、何物をも自由に捏造することが可能なメディアであった。捏造と真実との境界が、極端に曖昧なメディアであった。捏造と真実との境界を攪拌<sup>かくはん</sup>する特殊な能力を持つメディアであった。コンピュータによる画像処理技術の進歩は、この曖昧さに拍車をかけたにすぎない。そんな危険なメディアが、建築という危険なフィールドと結託したわけだから、こんな危ないかしいことはない。

この写真というメディアの捏造活動に歯止めをかけるには、③二つの方法しかない。ひとつは真実という基準の支配するジャンルの媒体として用いること。すなわち報道写真として、真実という基準の支配によって、たがをはめること。もうひとつの方法は、写真芸術という、自立した世界を用意してやることである。そこでは、被写体の美（捏造の起点）が問われるわけではなく、捏造

の結果だけが問われる。そのような場がひとたび用意されてしまえば、捏造という概念自体が意味を喪失することになるのである。しかし、この二つの方法が適用できないフィールドにおいて、写真を媒体として用いることは、きわめて危険、かつ無意味な選択であった。たとえば、それは写真を用いて美人コンテストを行うようなものである。一次選考に写真を利用することはあっても、最終選考に写真を用いる美人コンテストというものはない。写真はいかようにも美女を捏造することができるからである。写真を用いて仮に選んだ美女達を、最終的には同一の舞台の上に立たせて、肉眼で眺める。美を基準とする領域においては、そのような方法のみが、有効性を持つはずなのである。

ところが残念ながら建築を移動させることはできない。様々な建築物を美女のようにして、同一の舞台の上に立たせて見比べることはできない。ゆえに、しかたなく建築は写真に撮られ、写真の形式で評価され、比較されることになったのである。写真だけを用いて、「美女コンテスト」を行わざるを得なかったのである。そこに二〇世紀の根本的な矛盾が存在した。そしてコンピューターによる画像処理技術はこの矛盾を加速し、露呈させる役割を担ったというわけなのである。

では今後、この美女コンテストはどこに向かうのだろうか。まず予想されるのは、情報量を増やし、媒体を複数化しようという動きである。写真だけならば、捏造がいくらでも可能である。しかしムービーを併用すれば、捏造はかなり困難になるであろうという推測である。

しかし、この方向には、明らかに限界が存在する。いくら媒体を複数化したとしても、美という基準と、ヴィジュアル・メディアの間の断絶を完璧に埋めつくすことは不可能である。この問題を解決する唯一の方策は美という基準を見直すこと。美に替わる新しい基準を発見することしかない。

その徴候はすでに、様々な形で出現しつつある。結果としての美ではなく、ものを作るプロセス自体を評価し楽しむという傾向は、そのひとつである。建築雑誌や美術雑誌が、そのプロセスを読ませること、追体験させることに、ページをさきはじめたのである。建築家やアーティストもまた、結果としての美を競うのではなく、そこにいたるプロセス自体を競いはじめた。そのプロセスは様々

である。使い手の意見を聞きながら、使い手が施工にも参加して建築を作る「参加型建築」のプロセスをうりにする建築家が登場した。あるいは、今まで誰も使ったことがない珍しい素材を、試行錯誤を重ねながら、なんとか使いこなしたというプロセスがテーマとなる建築が登場するようになった。どちらの場合もできあがり写真を写真で見ただけでは、その良さ、その特徴のすべてを理解することは難しい。プロセスのドキュメンテーションと一緒に読んではじめて、その価値がわかるという仕組みである。えつ、そんな風にして作ってあったんですかと a を打つのである。

⑤ 要は写真の時代が終わりつつあるのではなく、美女コンテストの時代が終わりつつあり、美の時代が終わりつつあるということなのである。視覚的な美というものは、いかようにでも捏造できる。舞台に並べて、誰が誰より美しいと論じることが意味がない。大切なことは、舞台からひきずりおろして実際につきあってみること。同じひとつの時間、ひとつのプロセスを共有することなのである。そういう体験の重みだけが、人間にとって意味を持つということを、他でもない、コンピューターが教えてくれたのである。

(限研吾『負ける建築』)

問一 I Ⅲ にあてはまる語として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし    イ なぜなら    ウ ゆえに    エ ところで    オ あるいは    カ たとえば

問二 A・B にあてはまる語として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 日常的    イ 印象的    ウ 視覚的    エ 象徴的    オ 論理的

問三 a にあてはまる身体の一部を表す語をひらがなで書きなさい。

問四 X にあてはまる文として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 虚偽という価値基準ではなく、現実という価値基準
- イ 美醜という価値基準ではなく、真実という価値基準
- ウ 現実という価値基準ではなく、虚偽という価値基準
- エ 真実という価値基準ではなく、美醜という価値基準
- オ 純粹という価値基準ではなく、装飾という価値基準
- カ 装飾という価値基準ではなく、純粹という価値基準

問五 — 線部①「背景のタッチアップ」とありますが、本文で述べられている「背景のタッチアップ」とは**言えない**画像処理を

施しているのはどれですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

加工前



この建物が中心となる建築物です

ア



イ



ウ



エ



オ



問六 — 線部② 「写真自体がきわめて曖昧で、いい加減なメディアであった」とありますが、このように言うのはなぜですか。

その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 写真は、誰が撮影しても被写体がある程度美しく写せるものだから。

イ 写真は、被写体の真実を写したものであるかどうか見極めにくいから。

ウ 写真は、被写体の本当の姿を絶対に切り取ることができないから。

エ 写真は、撮影者の意図に関係なく被写体に説明を与えてしまうから。

オ 写真は、被写体をいくらでも複製する手段となるから。

問七 — 線部③ 「真実という基準の支配によって、たがをはめること」とは、どういうことを表していますか。その説明として

最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真実を伝えるために写真の加工は許容すること。

イ 写真に写されたものはすべて真実であると見なすこと。

ウ 写真の中には真実などないという前提をくつがえすこと。

エ 写されたものが真実であると保証された写真だけを用いること。

オ 被写体の真実の姿を伝えるために一切の加工を許さないこと。

問八 ―線部④「この矛盾」とは、どういうことを表していますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 美醜の基準など存在しないはずなのに、それがあたかも存在しているものと見なして建築物に順位付けを行うこと。
- イ 人が何を美しいと感じるかはそれぞれ異なるのに、一人だけの基準によって建築物に優劣を付けていること。
- ウ 建築物を評価するためには実物を見なければいけないのに、実物そのものを見ないで評価していること。
- エ 建築物の優劣は総合的な尺度で計らなければならないのに、外見上の美しさだけで決めていること。
- オ 現代の技術をもってしても建てられない建築物であるのに、その建築物を写した写真が存在していること。



問九 — 線部⑤「要は写真の時代が終わりつつあるのではなく、美女コンテストの時代が終わりつつあり、美の時代が終わりつつあるということなのである」とはどういうことを表していますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

で答えなさい。

ア 写真だけでは物事を評価することはできないので、実際に見たり触れたりできるものだけを評価の対象とするようになってきているということ。

イ 時代の変化につれて人間が感じる美しさも変化してきているので、より現代的な基準へと合わせるようになってきているということ。

ウ 美という基準によって人間に優劣を付けることは個人の尊厳にかかわる問題なので、世界各国で中止が相次いでいるということ。

エ 美しさというものは物事の一面でありどのようなようにでも捏造できるものなので、総合的な基準で物事を評価するようになってきているということ。

オ これまで美しいとされてきたものにも必ず欠点はあるので、それらを現代の基準で再評価する気運が高まりつつあるということ。

問十 本文の趣旨と合致するものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 現実の建物は、様々な制約により設計図通りに建築することが難しい。しかし、コンピュータの技術が進歩したため、建築家は自らの作品を写真などの視覚的な媒体を通して、設計図通りに表現できるようになった。

イ 建築物は、同一条件の下で比較することができないため、写真によつてその美醜を評価されてきた。しかし、写真に写る美しさとはきわめて不確かなものであるため、評価者の実体験の中での評価が行われるようになりつつある。

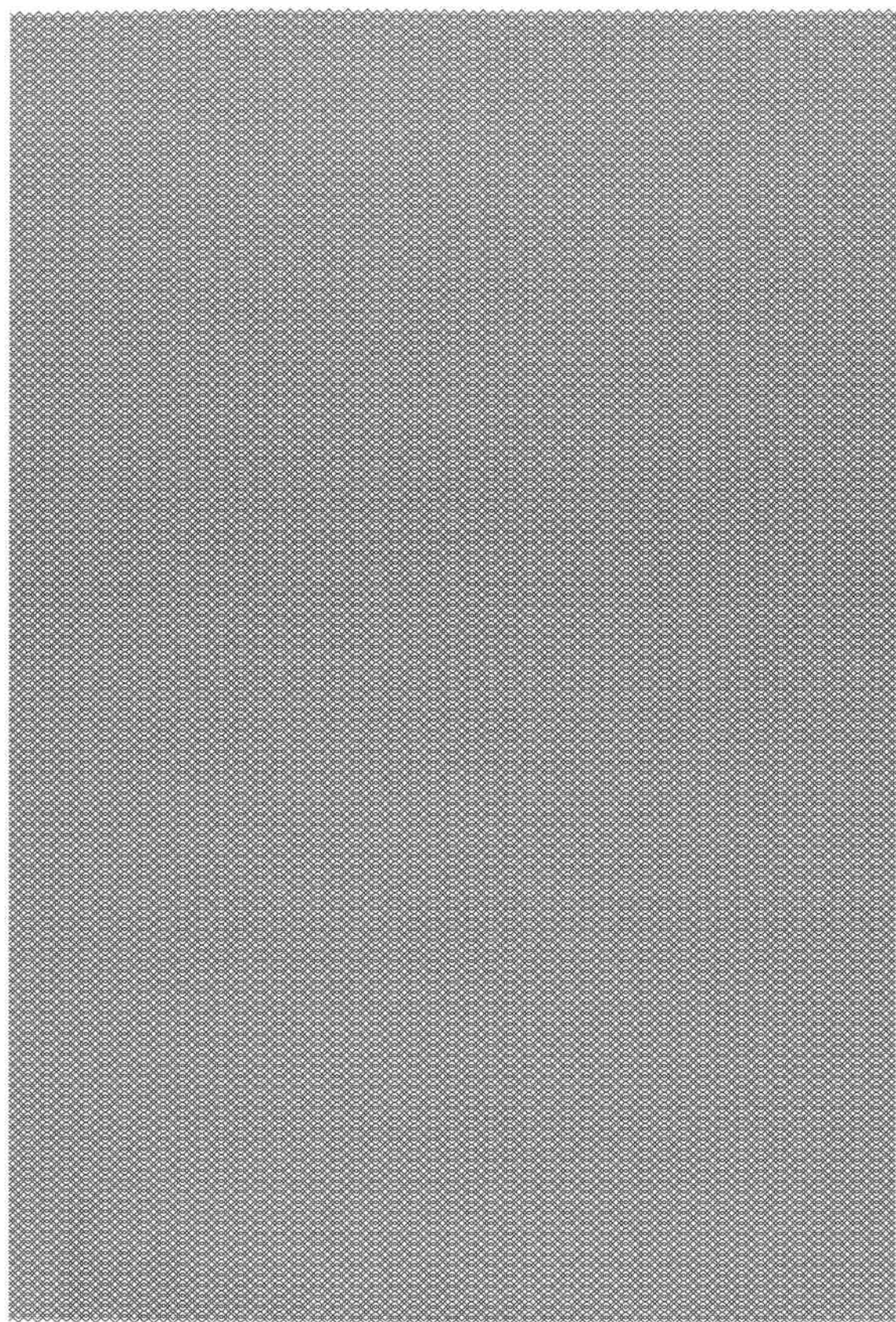
ウ 建築家の評価は、設計した建物以外に、その建物を捉えた写真を美しく見せる技術も重視されてきた。しかし、視覚的な美しさは平等な基準ではないため、建物の本質を表している設計図を重視しなければならない。

エ 建築家は、美しさという価値基準を何よりも優先して設計を行ってきた。しかし、その価値基準の下で設計された建物は、実生活には支障が生じることも多いため、より生活に根ざした建物を設計するようになった。

オ これまで写真は、被写体の真実の姿を捉えることができると人々は考えてきた。しかし、写真は静止した対象にしかその効果を発揮できないため、被写体をより多面的に捉えられるムービーを用いることが多くなってきた。

問十一 〓線部「他でもない、コンピュータが教えてくれたのである」とありますが、これはどういうことですか。八十字以内で説明しなさい。但し、「かえって」という言葉を必ず用いなさい。





受験番号	
氏名	ふりがな

1	
2	
3	
4	
(ちに)	
5	

一

1	
2	
3	
4	
5	

二

場所	俳句

↓

場所	俳句

↓

場所	俳句

↓

場所	俳句

↓

場所	俳句

三

問一	A		
問二	I		
	IV		
問三			
問四			
問五			
問六			
問七			
問八			
問九			
問十			

四

	問七		問三		問一	I
	問八		問四		II	
					III	
	問九		問五		問二	A
	問十		問六		B	

五